

# 音声の発達と英語教育

志 村 精 一

1. 此の問題をとり上げた動機
2. 対象となるもの
3. 実験に必要とされる授業態勢及び其の内容
  - 幼児の環境と英語
  - 興味を失わせないで
  - 授業時間
  - 聴覚教具の活用
  - 視覚教具の活用
  - 発音記号の歌
  - 基礎音と英語の歌との結びつき
  - 歌の選択に関して
  - 絵模型及び gesture の使用
4. 総 括
5. 結 論
6. 使用教材の一部

## 1. 此の問題をとり上げた動機

航空機と通信機関の急速な発達等に依って世界各国間の距離が時間的に短縮されつつある今日に於て、従来の読解力に重点を置いた外国語教育が今後読んで解る事は相手に言われても解り、書ける事は口頭でも相手に伝える事の出来る様なものに其の目的が改められつつあることはむしろ当然な結果というべきであるがここで最も留意するべき点は此の際其の対象となる相手について深長なる考慮が払われなくてはならないことである。

言葉というものが音声を基礎とするものである以上、其の音声の教育に於ては、言葉をあやつる相手によって其の手段方法が変るべきものであるが其の相手に対して講ぜられる手段は現在のみを対象としたものでなく将

来のことをも充分に考慮に入れたものでなくてはならない。例えば英語の場合<sup>○</sup>相手が常に日本人か又は所謂 Japanese English (日本式英語)の音を聞きなれている外人である場合は [r] と [l], [b] と [v], [θ] と [s], [ð] と [z] 等の子音を混同しても又は極端の場合母音と子音全部を日本語の音に置き代えた所謂完全なる仮名式英語発音でも結構間に合うので其の音声(特に sounds) 方面の訓練はとくなくおざりになり勝ちになる。

ところが<sup>○</sup>相手が日本語の音声に親しんでいない英米人であり、しかも国際電話使用に役立たせることをも考慮に入れての英語の音声訓練となると之には可成り手きびしい、しかも相当に時間をかけたものでなくてはなくなるが、其の音声訓練の初期の段階に於て仮名式英語を習得させられたものは<sup>○</sup>相手が変わった場合如何なる再訓練に依っても本式のものに矯正されることは甚しく困難であり、後で述べる絶対音感の教育と同じく其の成功率は年令の増加と共に減少するものである。

30余年前筆者が英国に留学した最初の頃英文学の時間に自分の好きな有名な英詩の一節を得意げに吟誦したが相手の英国人達には何の詩だか全然解って貰えず大いに恥をかいたことがあり又は英語を得意とする親類のものが、私の居た学校の校長を訪ねて来た時、内容的には立派な英語を話すのだが、発音の関係で相手に通ぜず、私が彼の英語を更に repeat して校長に伝えるという、英語を英語で通訳する奇妙な役目を演じたこともあった。大学生時代のことであつたが日本から大学に派遣されて来た学者の人達の中では相手の講義が速くてわからず、其の subject には門外漢の私達日本の学生が代りに狩り出されてノートをとることを頼まれたりしたこともあった。之等の事柄は且つて30余年以前の一昔前にあつた過志の物語りでは無く、当時とは世界の情勢が一変した今日に於ても未だに解消されずに持ちつづけられている悩みであることを海外に派遣された留学生等の最近の帰朝談からうかがい知ることが出来る。

之等の事実からして、日本の英語教育の欠陥が主として音声の問題にあ

ると考えられるので、音声と英語教育の問題を、これからの研究課題としてここに取上げてみることにした。

## 2. 対象となるもの

前に一寸ふれた絶対音感教育の結果報告によると、其の成功率は五才が80%、七才が60%、十二才が10%と年令の増加に反して極端に減少するものとされているが、大体此の比率が外国語の音声習得の場合にも適用され得ることが筆者の約20年間の幼稚園の児童から小、中、高、大学生社会人迄の各層を対象としての英語の音声教育の経験から知ることが出来る。

又幼児が言語を覚える過程については「耳から聞こえる音が先づ感覚性言語中枢に記憶され、ここから直接にしゃべる方の運動性言語中枢に連絡されると、意味のわからない模倣言語となり、そのうちに理解力の中枢が働き出すと、意味のわかる言語となる」と或る医学博士は言っているが以上二つの事項に加えて更に異った国語を使う種々の民族についての言語発達の比較研究に於ては、国語の相異にかかわらず、本質的にはほぼ同一の過程を辿ることが認められており、更に混血児や外国で生れたり育ったりした子供達の場合二つ或はそれ以上の異った国語を相手に依って自由に使い分けることの出来る事実からしても外国語の音声の場合殊に sounds の recognition と production の面をなるべく最初の段階に於て捕えることが必要と考え、之を日本国内に於ける日本の幼児について取上げる事にした。

けだしここに言う幼児とは、Gesell の言う如く一才から四才迄の幼稚園前期 (pre-kindergarten) を指すものであって、六才迄を幼児期とする解釈とは区別した積りである。

即ち出生一年後には大多教の子供は話し始め四才までの間に言語その他の発達に著しきものがあるとされ大体において何処の国の子供でも其の年ごろまでには話し言葉は一応できあがるものと考えられているので、大体

二才から四才迄の幼児について自分の実験を基礎としたものを発表する事にした。

### 3. 実験に必要とされる授業態勢及び其の内容

#### ○幼児の環境と英語の Sounds.

先に述べた日本国内に於ける日本の幼児とは日本語の音声を絶えず耳にし又は口に出している環境の下で育っているものを意味することであって、此等の日本の幼児に聞きなれない英語の sounds をどの程度迄覚えさせることが出来るか、即ち大体20位とされている日本語の sounds（東京日本語学校長 長沼直兄氏の日本語音表に依る）を覚える過程にあるものに如何にして其の二倍を越える約45の英語の sounds を同時に覚えさせることが出来るか、ということが私の研究の目的であるが、一般的に考えて一番望ましいと思われる方法は、少なくとも母国語の音声と同程度、或はそれ以上多くの回数、英語の sounds に親しませることであろうが、実際に於ては我々が日常日本語を使つての生活を営んでいる限り、それを実行に移すことは容易なことではない。

事実現在私が幼児の三つのクラスに当てることの出来る授業回数は各クラスとも週に一回づつであり、しかも其の一回の授業時間は大体15分を限度とし其れ以上保たすことは無理である。之を音楽教育の場合に例えれば毎日朝から晩迄日本音楽のみを立て続けに演奏している長唄か謡曲の師匠の家の幼児に、週に一度しかも15分間と時間を切つて外国音楽を教える様なもので到底満足な結果を得ることは望めないわけである。併し実際にやってみると大人の場合と異つてこちらの期待した以上に英語の sounds を捉んでいる場合が多く、之は概ね幼児の言語中枢の包容力が無限に近く其の機能が大人と比較して格段の相違があることに依るものと思われるが、之に加えるにテープやレコード等聴覚教材の手を借りて、家庭に於ても自学自習の意味で反復練習を多くさせた場合其の成果の素晴らしさには幾度

か驚異の目を見張ることがある。

### ○興味を失わせないで

幼児が音に対して大きな関心を持つことは極めて自然なことであるが、之を余りにも他から強いると其の関心を逆に失わせる原因となることも考えられる。要は常に幼児の興味を失わせない範囲内で授業を進めることを念頭に置くべきでそれには授業中の幼児の動作を仔細に観察することが必要である。

大体に於て2才6ヶ月位の幼児でもやり様によっては10分間位はおとなしくさせておくことが出来るが、中には一分もすぎると部屋中を歩き廻るものや「もう帰ろうよ」とお母さんにせがむものも出来てくる。併し此等の動作に依ってのみ興味の有無を判断することは危険であって大人には興味を失った様な態度に見えても子供は案外そうでなくよくきいて覚えるものである。

一方おとなしくきいているように見える子供でも欠伸が出たら stop の危険信号と思って、直ちに授業を止めなくてはいけない。之を無視すると興味を失ってしまって、授業を嫌がり、元も子もなくしてしまうことになる。

又授業中は他に強く興味を引く様なものがないよう特別の考慮を払うことが大切であるが、幼児と大人とでは興味を引くもの自体に見解の相違があるので此の点特に注意を要する。

一匹の猫がまいこんできた為に其の授業が台無しになって了ったことは大人にも考えられるが、幼児の一人の靴下止めが新しく、変った形をしていた為に授業が思い通りに進行しなかった場合等は其の幼児自身か或は附添の母親の外には其の原因を知る由もない。

之は要するに興味を失うということが、授業の為かそれとも他に原因するかを的確に探知し得ることが幼児教育を行う上の必要条件の一つであり之には、自分の幼児を一番よく知っている母親の協力を求めることが必要

とされてくる。

### ○授業時間

以上の事柄からして授業は手際よく退屈を感じさせない様に、むしろ「あっ」と言う間に済んでしまって、子供ながら物足りなさを感じる位が適当であって、それに費す時間は子供の其の日の condition に依ってもちがうが、大体最初の間は10分から15分が限度であり、段々進むに従って時にはすでに覚えた歌の復習をする場合など多少時間をかけてもよいと思われるがそれも30分を限度とする。

### ○聴覚教具の活用

英語の sounds を出来るだけ忠実に幼児の耳に伝える為には優秀な native speaker を活用することが好ましいが其の様な speaker の生の声を其の都度授業中に聞かせることはなかなか実現出来ないことであるのでテープやレコードに録音されたものを出来るだけ多く用いることが必要である。併し之とても例えば単独音の場合特に無声子音の録音再生には困難を伴うので現在では不本意ながら之等の場合のみ日本人の私が自らやらざるを得ない立場にあるが、之はあく迄も暫定的なことであって将来は忠実に再生された録音を私の口の動きを見せながら聞かせることが望ましく更に一步進んで native speaker が talkie に吹き込んだものを使用出来る様になれば之に越したことは無いであろう。

授業中に使用する聴覚教具は単独音、単語、短い句又は文章の繰返し作業には Victor の MAGNAFAXE の様に細かい部分の再生くり返しのできる M.D.R. (Magnetic Disk Recorder) 型のものがよく、之に M.T.R. (Magnetic tape Recorder) 一音質的に、より優秀であって dual channel 方式即ち普通の tape Recorder としての性能をもつほかに Tape の上段及び下段両トラックに同一方向の録音、再生が出来るものを併用するこ

とに依って更に著しく効果をあげることが出来る。

一週15分の授業を効果あらしめる為には、之を授業時間外にも反復して聞かせることが必要で之には一回の授業の実況、又は数回の授業から抜萃したものをテープに録音しテープレコーダーを持っている人達には其のコピーを、レコードプレイヤーを持っている人達には其れを更にレコードに吹込んだものを配って之を毎日家庭に於て出来るだけ多くの回数反復して聞かせる様にしている。但し家庭で之を聞かせる場合は、授業の時の様に一定の時間を区切ってそれに専心させる必要はなくむしろ遊ばせながら根気よく自然に耳から入れる方法で出来るだけ多くの時間 sounds に親しませることが好ましい。けだし幼児は例外無しに家庭に於てこの様な反復演奏を聞くことを好むものである。病気で床についている時でもテープ又はレコードを掛け続けることを要求し粘土遊びの伴奏には欠くことの出来ないものであったり、又は之をかけながら家庭の者を生徒にしたてて自分が先生になって私の身振りを真似したりすることを好むといった様なことがしばしば母親から報告されている。此等の例は授業中必ずしも active でない、むしろ注意散漫と思える幼児の場合にも同じ様に見受けられることであって、之の各家庭に於ける学習はとりも直さず一人一人の幼児を Language Laboratory の booth に入れて反復練習させるのと同じの効果を各家庭であげていることであり其の意味からしてもテープ又はレコードを再生する機械を各家庭に於て備えることは絶対に必要である。

### ○視覚教具の活用

聴覚にのみ頼らず、視覚にも訴える事が効果的であると考えられるので発音記号を色彩別で表わすことを考案した。発音記号は Daniel Jones 氏の I.P.A. (万国音標文字) が日本では一番多く使用されているので之を採用することにした。

1 [ʌ]	8 [ɑ:]	13 [aɪ]	22 [b]	23 [p]	28 [v]	29 [f]	[dʒ]	[tʃ]	[m]	45 [l]
2 [e]		14 [aʊ]	24 [d]	25 [t]	30 [ð]	31 [θ]	40	41	42 [n]	
3 [i]	9 [i:]	15 [eɪ]	26 [g]	27 [k]	32 [z]	33 [s]			43 [ŋ]	
4 [ɔ]	10 [ɔ:]	16 [ɔɪ]			34 [ʒ]	35 [ʃ]			44	
5 [u]	11 [u:]	17 [oʊ]			36 [h]					
6 [ə]	12 [ə:]	18 [ɛə]			37 [w <sup>x</sup> ]					
7 [æ]		19 [iə]			38 [r <sup>x</sup> ]					
		20 [ɪə]			39 [j <sup>x</sup> ]					
		21 [uə]								

即ち上の表に示された如く母音は黒色、破裂音は赤色、摩擦音は緑色、破擦音は茶色、鼻音には青色、側音には黄色を使って、其の各々の音の特色を知らしめることに重点をおくことにした。

以上の六色を選ぶに当っては特に音と色との関連に深い配慮は払われていない。即ち二十一の母音を更に細かく短母音、長母音二重母音の三つに色別けすることも考えられるがなるべく色数を少なくすることが好ましいと思われるので普通の鉛筆の色即ち黒色を用い、黒板に書く場合には白いチョークを用いることにしているし、子音の場合にも破裂音、摩擦音、破擦音、鼻音、側音の各々を少し over と思われる位にはっきりと区別して



発音させることを必要とするので成るべくわかり易い色彩を選んで視覚にも訴える方法をとったに外ならない。

けだし赤緑青黄の四色は色盲と色弱とを見別ける場合に使用されるものであり、此等の色を識別出来ない色盲及び色弱の数は大体五十人のクラスの中で、二、三人を占める程度即ち約五分という低い統計が示されているので大部分の子供達に判別出来る色として採用した。

子音の上につけた<sup>x</sup>は無声子音を意味し [<sup>x</sup>w] [<sup>x</sup>r] [<sup>x</sup>j] の<sup>x</sup>は後に母音を伴って摩擦音となることを示したものである。

又破裂音の全部と八つの摩擦音、及び二つの破擦音を枠で囲んだのは、各々二つづつならんだ子音の出し方は同じであり、ただ両者の違いは有声音と無声音であることを示したものである。

此の色別発音記号の表は大きな掛図として教室で利用する外に、一音一枚の合計四十五枚一組のカードとしても、又は四十五の音の掛図を一枚のカード位の大きさに縮小したものを各自に一枚ずつ持たせても使用させることが出来る。

之は元来が幼児教育の為に考案した積りであったが、たまたま、より年上の者に適用してみても非常に効果的であるので、幼稚園、小学校、中、高等学校と段々と利用範囲が拡大され遂には大学の英語科英文科の生徒達の授業にまで持ち込まれるようになって了った。

其の利点の一つとしては単独音の外に単語、句又は文章の発音指導の場合にも六色のマジックインク又はチョークを使って簡単に紙又は黒板に書くことの出来ることであって、之に依って我々日本人の苦手とする [b] と [v] 又は [r] と [l] 等の音色の区別を従来の一色のみ使用しての発音記号の指導よりもより容易に判別させることが出来る様になったと思われる。

此の sounds の recognition の訓練を行うに当ってはまづ最初に其の目的を音と色との関係のみに絞るやり方が初期の段階に於ては必要であると思われる。例えば [b] という破裂音を出して幼児に色別発音記号表を見せ

ながら赤色であることを先づ最初に認識させる方法である。此の際赤色の中のどの形かということにはこだわらない様にする。破裂音を鉄砲か花火の音に例えて、手真似をしながら「そら [b] といって花火が暗いところでぱっと赤い火を出すでしょう。さあこんどは [d] という音は火が出るでしょうかどうかでしょう」といった要領で覚えさせていく。又は両手で擦する真似をして [v] の発音をして「今のは鉄砲がならないでせう。だから赤い火は出ないでこちらの色(緑色を指して)ですよ」と教え、次に手真似なしで、[Z] の音を出してから「今のはどちらの色の音でしょうか?」と言って幼児に破裂する音か擦する音かをあてさせてみる。同様にして破裂する音と摩擦する音を同時に出す手真似をしながら発音して破裂音の茶色を、鼻をつまんで音を止めて見せて鼻音の青色を、舌の両側から音を出すところを見せながら側音の黄色をそれぞれ指しながら指導してゆき最後には幼児に音を聞かせて其の色を当てさせるようにする。其の際「今のは何色であるか」と色の名前を覚えさせて言わせることは最初の段階に於ては余計な負担をかけることになるからただ必要の色を指でささせることが望ましく、後になってから [red] とか [blu:] とか日本語を使わないで直接英語で教えることがよいと思う。

次に個々の音の指導に移るが最近子音の中の破裂音を覚えさせる方法として一つの話しを造り上げてみた。

即ち 

[b]	[p]
[g]	[k]
[d]	[t]

 の一段目の [b] [p] を家の玄関の戸にたとえて外から見える二枚の戸(両唇のこと)をぴったりと閉めて音をためてから、ぱっと声を出すと [b] になり、息を出すと [p] なることを教える。

二段目の [d] [t] は玄関を入った靴をぬぐところを出す音でそれには舌を使うので戸は少し開いたままだが内部は外からはよく見えないと説明する。三段目の [g] [k] は靴脱ぎ場からずっと奥に入った部屋即ち喉のあたりで出る音であることを知らせる。

以上のことを十分に納得させておいてから破裂音の一つ一つを見せながら聞かせて口真似させ、今のは玄関の戸の音か靴脱ぎ場で出した音か或は奥の部屋で出した音かを判別する練習をさせる。

この例え話による破裂音の訓練は予期以上の効果をもたらした。[p] [t] [k] 等の無声音を単独に発音する場合其の後に母音をつけ勝ちの所謂仮名式発音から完全に脱出することが出来、又有声破裂音を含めて其の後に母音を伴う単語の場合も native speaker なみにはっきり破裂音+母音の発音が出来る様になることを知った。之に力づけられて摩擦音の中の八つの音を最初にとり出して之にも説明をつけてみることにした。

[v] [f]

[ð] [θ]

[z] [s]

[ʒ] [ʃ]

「前の赤い色の音(破裂音)の時は音を出す時まず口の中で一度両方の唇や舌や喉の奥の方でぴたっと止めてからはっと出しましたが今度の緑の音(摩擦音)は口の中で全然止めないで、すーっと洩れて出る様にするんですよ。それには玄関の戸が赤い音を出す時の様に二枚ともやわらかい戸(両唇のこと)だとほらちょっとでも閉め過ぎると音が止って外に洩れなくなって了うでしょう。だから上の方の戸だけ固い戸(歯のこと)にとりかえましょう」というような説明をしながら [v] と [f] の音の出し方を教えてゆく。この練習は思ったより手数のかかるものである。第一に幼児には下くちびるをかむという様な説明では納得出来ない場合が多く逆に上くちびるを下歯でかむものも出てくる始末で鏡を見せたり親の協力を求めたりして気永に訓練する必要がある。ここで特に注意を要することは、折角上記の方法で上歯で下唇をかむことが出来る様になっても、とっさの場合にそれをやる時間的余裕がない為日本的のブ又はフの音を出して了うことがあるから、最初まづ用意又は ready! で下唇を噛ませてから次に音を出させるようにしなくてはいけない。次の [ð] [θ] の場合には玄関の両方の戸が固い戸(下歯と下歯)に変えられそれに舌が其の戸の間から顔を出して外を覗きながら出す音であると説明し之も ready でまず舌を上下の歯の間から少しばかり出してから発音に移

る練習をさせることが必要であり ready 無しではとかく舌の用意が出来ない中に音を出すことになり、次の [z] [s̰] に近い音になって了う場合が多い。

[z] [s̰] の音については両方の戸が固い戸(上下の歯)に成って了って其の間から洩れる音であると説明していいが唇がとがらないで外から見たのでは音を出しているかいないかがわからない様でなくてはいけないと注意しないと母音 [u] が後に来た場合日本のズやスの音になり勝ちになる。

[ʒ] と [S̰] はまづ [s̰] と [S̰] の音を交互に出してよくきかせることが必要であり説明としては [S̰] を出す時は「口が少しとんがるんです。」位でそれ以上余り難かしいことを言わないでまづ両方の音の相違を聞いてわかるようにさせその後で [S̰] の音を出させるようにする。[S̰] の音が出せる様になったら息を声に変えさせて [ʒ] の音を出させる様にする。

[S̰] の音を出させる訓練は意外に困難なものである。其の主なる理由は幼児は己に日本語の音の「シ」に親しんでいるので母音の [i] を伴った場合 [si] と「シ」を混同するばかりでなく折角出来上った [s̰]+[i] の [si] の音も「シ」に引戻す危険性がある。

以上八つの摩擦音の説明も丹念に根気よく実演を伴って行えば幼児に理解させることが出来るが現在のところ破裂音の様には簡単にゆかない。

他の子音にも出来るだけ幼児にわかる様な説明をつけることにしている。例えば [h̰] は口で大きく息をはく時の音」だとか [w̰] は「水撒きする時に使うホースの先の様に口を尖らす。」とか [l̰] の場合は「口に舌の戸を上歯に引かけて立てかけて置いてから声を出す。」とか色々の例をひいて話している。

私の家では lesson に来る子供の生徒さん達の為に控室に講談社の絵本を揃えて置くが幼児達もえを見ることに非常に興味をもっていて肝心の lesson になっても之を手離させるにはなかなか苦心を要する次第であるが勿論彼等は字は読めないのだから専ら絵を見るだけであるが、それだけで

は満足しきれなくなり、附添いの母親に「お話をよんで。」とせがんで絵を見ながら熱心に話に耳をかたむけている。そして一度聞いて面白いと思った話はいつまでも覚えているものである。

之にヒントを得て面白いと思われる様な例え話を引用することに努めているが、之が幼児の興味を引いた場合には例えば発音記号を一つ一つ見せても思ひ出せない音が表を見せた場合、以前に聞いた話と結びつけて思い出すという様なことが起ってくるものである。

前の [v] [f] の発音指導のところでもふれたが最初の中は咄嗟の場合に下唇を上歯でかむ時間的余裕が無い場合が生ずるものだが、之は他の [θ] [ð] [n] [ŋ] [l] 或は [w] [r] [j] 等を発音する時にも考えられる事であって之の指導をもう少し細かく説明すると一で口の恰好をつくり二で声又は息を出し三でその音の次の音をも加えて出すという方法を用いる。例えば [fɔ:] という単語の場合一で上歯で下唇をかみ二で無声子音を出し三で母音 [ɔ:] を加えて発音する。

[faiv] の発音は一と二は前と同じで三で母音 [ai] を出し更に、一にもう一度帰って二で今度は有声子音を出すといった工合で [faiv] を完成する。  
[θ] [ð] [n] [ŋ] [l] 其他は之の要領で出来るが [w] [r] [j] の場合は一は同じだが二では単独音は出せないから一の次は二を省いて三で母音をつけて発音する。

以上述べた方法に依って子音の単独音又は子音の重さなった consonant clusters 或は其等に母音を伴った単語の発音等を指導してゆくことが出来るが母音そのものの発音を教えるには子音の様に手をかけて教えることが出来ないだけに正しい音を覚え込ませることに困難を感じる。即ち母音の場合には例え話が通用しないからである。此の場合にはただ正しい音が出る迄其の音を幾度も反復して聞かせて多少口の形や音の出し所を教える以外に手が無いので幼児にとっては誠に詰まらない授業になり勝ちである。次の発音記号の歌も之を多少なりとも救う意味で作り出されたもので

あるとも言えるであろう。

### ○発音記号の歌

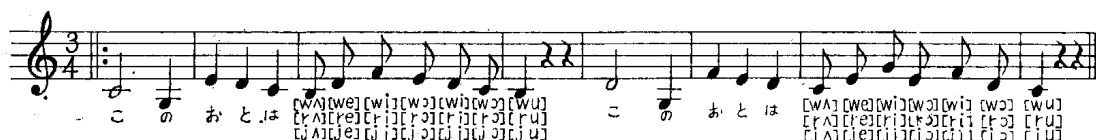
以上45の英語の sounds を一つ一つ指導する場合に之を幼児に容易に理解させ又反復させる手段の一つとして発音記号表を見せながら歌う発音記号の歌をつくってみた。

此の歌のメロディーは、Mozart の Symphony No. 39 の第三楽章 Menuetto の Trio の一部を偏曲したものである。



このメロディーで45の sounds の  $\overset{x}{[w]}$   $\overset{x}{[r]}$   $\overset{x}{[j]}$  を除いた全部が練習出来るわけである。

$\overset{x}{[w]}$   $\overset{x}{[r]}$   $\overset{x}{[j]}$  sounds には母音 [Λ] [e] [i] [ɔ] [u] をつけて、次の様に歌の一部を変えて歌わせる。



之で45の個々の sounds を全部カードと発音記号の歌で覚えさせることが出来るわけだが、適当な時期を見て此の歌の第一章節と第五章節をそれぞれ



like this と英語で歌わせる様にする。

此の発音記号の歌を使用しての sounds の指導は予期以上の効果をあげることが出来た。第一に此の歌のメロディーが幼児に大変に親しみ易く短時間で覚えられることである。しかも此の歌が決して幼稚なものではなく中学一年生位の子供迄があきないで喜んで歌い続けることが出来る。之は

一つには Mozart が作曲者として如何に偉大であったかの一面を物語ることにともなるであろう。

第二に有声子音と無声子音の区別をはっきりと理解させることが出来る。即ち [p] [t] [k] [f] [θ] [s] [ʃ] [h] [tʃ] 等の九つの無声子音は息の音で、メロディーが歌えないことをはっきりとわからせることが出来る。同様に [w] [r] [j] の三つの子音が後に母音を伴わないことには摩擦音にならないことも容易に了解させることが出来る。

第三に英語の母音は日本語の母音に比較してよく響くが、この母音を響かせる練習は歌わせることに依って一番能率を上げることが出来る。

### ○基礎音と英語の歌との結びつき

次に之等の45の個々の sounds を幼児に適した英語の歌と結びつけることにする。

之には発音記号表を使用する外に二つの方法を時に応じて用いることが好ましい。

其の一つは例えば幼児の授業は大抵午後やることになっているので最初の greeting の “Good afternoon, everybody” [gud a:ftənu:n evribɒdi] を歌にして [gud a:ftənu:n tə ju: gud a:ftənu:n tə ju:, gud a:ftənu:n evribɒdi, gud a:ftənu:n tə ju:] を歌いながら [f] を発音する毎に [f] のカードを口の下に当てて口の形を見せながら覚えさせ同様に生徒達の先生に対する greeting “Good afternoon, Mr. Shimura” でも [f] のカードを使用する。

之に前に述べた発音記号の歌「この音は [f], [f], [f], [f] を併用して [f] の音を色、形、音の三つから覚えさせる。次に [evribɒdi] の所で [v] のカードを使って [f] の有声子音であることを知らず知らずの間に覚え込ませる。次の先生の “How are you, to-day? の質問とそれに対する greeting “Fine, thank you” [faɪn] [θæŋk ju:] もメロディーをつけて再び [f] の

カードを用い、後に [θ] のカードで [θ] の発音に移る。

第二の方法は [f] [v] [θ] 等個々のカードを用いずに歌全部を色別の発音記号で書きつらねた 

hau a: ju: tθ'dei?
--------------------

fain, θæŋk ju:
----------------

 の様な細長いカードを作り其の中の [f] の個所を其の都度指しながら指導するやり方がある。概して第一の方法の次に第二の方法を用いるのが効果的である。

### ○歌の選択に関して

以上の方法で母音子音の単独音及び其の組合せの数を段々とましてゆくのであるが、やたらに急速に音の数をふやしたり次から次へと新しい歌に移ってゆくと幼児はついて行けず仮名式発音で間に合わす様になる恐れがあるから此点留意しなくてはならない。

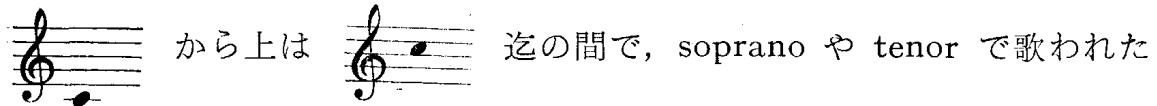
それには歌の選択ということが重要な問題となってくるが、音の指導と結びつけるに相応しいものとしては、原則として同じ文句を幾度も繰り返すものが望ましい。併しそればかり多くすることは選択の範囲を極度に狭ばめることにもなるので他の要素として考えられることは時には幼児に歌の大意がおぼろげながらもつかめるものを選ぶことも必要である。それには余り難しい内容のものや詩特有の平常余り使用しない言葉使いの含まれたもの等はさけるべきで極く普通の文体のものが好ましく之は後になって多少手を加えれば日常会話の練習文として役立たせることも考えられる。又後で詳しく述べるが動作を伴わせたり絵や模型を活用したりする上にも適当な歌詞をえらぶことが必要である。

歌を利用しての指導の利点は幼児が興味をもって家庭でも反復練習出来ることの外に前に発音記号の歌のところでも述べた様に我々日本人が外国語を話す時に最も困難を感じる母音の音色の出し方や響かせ方を習得する上にも役立ち又之も至難とされている英語の Intonation や Rhythm にも自然に馴染むことが出来る。

以上の目的に副う為には幼児の歌える範囲の音域で歌わなくては意味の



無いことになり此の音域内で歌われたものを特にレコードやテープ使用の場合選ぶことが必要であるが今迄の経験に依ると大体幼児の音域は下は



ものは概して其の音域外になるので適当でない。

歌が外国語の発音指導の上に如何に効果的な役割を演じるかは之を言いかえれば普通話する場合にやっと役立つ程度の発音指導を受けたものでは歌う場合往々にして相手に歌詞の意味を伝えることは出来ないが、歌って歌詞の意味をはっきり相手にわからすことの出来る程度の発音指導を受けたものは、普通話する場合少なくとも sounds に関する限り相手に大した不自由を感じさせないで済ますことが出来るであろう。

筆者が最初此の点に気付いた動機は相当発音のいい中学生のグループに英語の歌の指導をした際大体音量は日本の歌を歌う時の $\frac{1}{3}$ 又は $\frac{1}{2}$ に減じてしまい、其の発音は至極不明瞭で何を歌っているかわからず rhythm も凡そ歯切れの悪いものになってしまった。何度やり直してみても思った様な結果が得られず其れ迄の発音指導が如何にいい加減のものであったかを痛感した。其れ以後は英語の45の一つ一つの sound が正確に発音出来得る様にする為にも又 intonation, rhythm の感覚を植えつける上にも発音記号と歌とを併用しての指導法で徹底的な訓練をほどこすことが最も必要であることを悟った次第である。

### ○絵模型及び gesture の使用

以上述べてきた音 — 発音記号 — 歌の結合に絵や模型等の視覚教材更に gesture をも加えることに依って相互間に密接な関連をもつ所謂視聴覚教育を更に強固なものにすることが出来るが殊に絵と模型と gesture の使用は幼児に禁物である抽象的で理論的な教育法から脱け出し之を situation を設立した生活的なものに代えることに役立つものと思われる。例えば

“London Bridge is falling down” の絵を描く場合橋が真中から割れて上下に移動する様に別に紙片や糸を使って操作出来る様にし又は row, row, row your boat の場合にオールだけが動く様な絵を用意することが必要であり同様に女の子の絵と綺麗な人形を用意して Mary wants a pretty doll の歌を教える場合でも Mary の絵はほんとに可愛らしい少女に見えるものでなければいけないし, a pretty doll にはほんとに綺麗な人形を使わなくてはいけない。之は大人の場合でもそうであるが教材の用意を怠って、ひげ面や禿頭の先生が Mary を代表したり鼻のかけた汚い人形を使って a pretty doll の代りにしたりするのは好ましくないことであるが相手が幼児の場合は特に彼等の持つ夢を破ることになるので絶体にするべきである。

#### 4. 総 括

ここで今迄述べてきたことをもう一度まとめながら思いついた点を補足し、更に今後研究すべき問題等にもふれてみたいと思う。

○最初幼児が声を出す迄には大体四回から多い場合には二十回以上の授業回数を要することがあるが、なかなか声を出さない幼児の場合でも其の期間聞いたことは蓄積されているわけで、一度堰を切ると前から声を出していたものと同じ様にとうとうと流れ出るものである。要はそれ迄教師も父兄も焦らずに辛棒強く待つことである。

○二年目位になると新らしい音や歌を聞いてから口に出す迄の時間が著しく短縮されるが、其れは必ずしも長く覚えていられることでは無くむしろ直ぐに忘れて了うものであるから常に所謂身につく迄反復練習することが好ましい。併し例えば病気其他の止むを得ない事情に依って反復練習が一時出来なくなった場合でも平常それが充分になされていると丁度 season off で一時練習から遠ざかっていた運動選手が season になって再び練習を始めると、短時間で元の form に戻ることが出来る様に前のことを思

い出すのに余り時間を必要としないことがある。基礎訓練の度合と其の対象となるものの内容如何に依っては相当長期間に渡って其の訓練が中止されても再開後は比較的容易に元に復し得ることが考えられる。

○三年目位になって今迄覚えた歌の歌詞の朗読又は簡単な文章の聞き方、話し方をやる場合 sounds の指導には余り手間を掛ける必要なく、むしろ Rhythm や Intonation の方に専心することが出来る。

○絶対音感教育を受けている者は殊に進歩が速い。

○幼児は色より形の方が recognize し易い様であるから指導上余り多数の色を用いない方がいいようである。但しこれ又余り多数の違った形を示すことは混乱を招くことになる。

○発音記号のカードを見て、其の音を自分で想ひ出して口に出すよりは、同じ音を他人が出したのを聞いて、数枚のカードの中から其の音のカードを選び出す方が容易である。

○英語の授業のある幼稚園に入園した場合、他の児童の発音が自分のと違うと其の善し悪しはわからないが、直ちに其の違いに気付いて親に訴える。

○付添いの母親の中には英語教育に戦時中其他の理由で恵まれなかった学校生活を送った人達もいるが、自分達の子供の為に英語の音に対して非常な関心を持つ様になり彼等の大部分が発音記号に精通してテープ又はレコードを通しての家庭学習に於けるよき助言者たり得る様になる。之は音楽の才能教育に於てまづ最初に親が家庭に於て自分等の子供の復習をみることの出来る様に教え込まれるのと同じ様な結果になるわけである。

○最初相当注意散漫と見受けられる幼児も段々と或る一定の時間中は注意を集中する様になり従って行儀作法も正しくなり之が英語の授業の時ばかりでなく他の場合にも適用されることが多い。

○俗に生来怠け者という言葉があるが、身体障害者を除いては未だ曾て幼児が母国語を面倒臭がって、聞き覚えなかったという例は恐らく無く此の時代に外国語の音をまぜて聞かせても之を忌み嫌うということは第一に彼

等にとっては其れが母語国の音か外国語の音か判別出来ない時代でもあるので、到底考えられない。従って方法さえ誤らなければ之が幼児にとって大きな負担となることも考えられない。

○現在では日本語の二十音に英語の四十五音を加えて聞かせているが、両国語の音をいつ迄も混同して困るという例は余り聞いていない。例えあったとしても一時的のものであって、之は日本語の発音の場合でもある音が完全に出ないというのと、一つの音だけなら出せるが他の音と組みあわせると乱れてしまうという様なことがあるがこのような発音の乱れは五才ごろには大体なくなるものとされていて、英語と日本語の発音の混同についても大体同じことが言えると思う。

○三年目或はそれ以上の教材として発音記号で書かれた文章にメロディーをつけた一種のオペラの台本みたいのものを使用し、まづ文章を歌で覚えさせ後でメロディーをとって普通に読ませる方法をとってみたいと思う。

○話し方に於ける特に母音の音色について今後研究を必要とすると思う、幼児時代の訓練に依って日本語の母音の音色を必要に応じて英語の母音の音色に近いものに変えることが可能であるかどうかは今後取組むべき問題である。

現在の国際状況からしてみても将来我々は一つの外国語を習得したのみでは不十分であり、それを土台にして他に少なくとも二、三ヶ国語を必要とすると考えられるので、音声の訓練に於ても英語の音のみでなく、もっと広いものを出来得れば幼児時代に植え付けることを必要とするであろう。その意味からして若し幼児にまづ八つの Primary Cardinal vowels の sounds (1) i (2) e (3) ɛ (4) a (5) ɑ (6) ɔ (7) o (8) u をそして更に (9) y (10) ø (11) œ (12) ɕ (13) ɒ (14) ʌ (15) ɔ̃ (16) ʊ (17) ĩ (18) ũ を植え付けることが出来たら幼児は頭の中にはめこまれた此等の Cardinal Vowels の scale から温度計の目盛から温度をよむ様に今の音は Cardinal 2.) e の音から三分の二 Cardinal 3.) ɛ の音の方に寄った音だとか、フランス語の thé の é の音

やドイツ語の Schnee の ee の音は Cardinal 2) e の音に近く、フランス語 la の a や英国の北の地方で使われている grass や chance の a の音は Cardinal 4) a の音に近いとかいう様なことが聞き分けられ又其等の音を出すことも出来ればどの国の言葉を習得する上にも便利となろう。

之れも今後取り上げられねばならぬ研究課題である。

## 5. 結 論

幼児の英語教育とは、英語の持つ音声を覚える為に、必要な筋肉力と感覚力をつける練習即ち training であって知識を授けることが目的ではない。言い換えれば、将来役に立つ英語の力を造る基礎的訓練を行うことであり、之を続ければ develop させることが出来るが、止めれば其の間眠っている。併し再びそれを始めれば眠りからさめて活動し出す。丁度一度泳ぎを覚えた者は水に入れば身体が浮き、自転車に乗ることを覚えたものはサドルの上で身体のバランスを取ることを一生忘れないでいられる様に。

日本人の国際的環境が段々拡ってゆくのに對し、日本の幼児の発音機構の中にそういう意味の基礎的訓練を加えることは充分意義あることと考え、今後更に此の研究を深めてゆく積りである。

## 6. 使用教材の一部

ここに参考迄に教材として使用する歌詞の中から主なるものを解説つきで連記して見る事にする。繰り返しは省略する。但し実際に使用する場合は全部発音記号を用いる。

### ◎ Greeting に関するもの

備 考

○ Good	morning	to you.	[f], [v], の発音。
	afternoon		
	evening		
	night		
	bye		
		Mr. —.	[dm], [dn], [db] に於ける
		everybody.	[d] の扱い方。

○ How are you, to-day?

○ Fine, thank you.

[f], [θ] の発音。

○ How do you do

Mr.	Johnson.
Mrs.	
Miss	

[mis], [misiz], [mistə]  
を絵と結びつけての発音  
練習。

○ Happy birthday

	dear Mary.
	to you.
	— san.

[æ], [θ] の発音と [ə:] と [ɑ:] を  
間違えた場合の意味の相違。

○ A Happy New Year

	to you.
	dear Mary.
	— san.

[ə] を軽く  
[jiə] の [j] に注意。

◎ クリスマスに関連あるもの。

○ Merry Christmas

	to you.
	— san.

[k] のあとに母音のつかない様に。

○ Santa Claus will soon be here  
Mary wants a pretty doll

at christmas time.

[kl], [w], [hiər ət] の発音。  
[priti] の [ti] がチにならぬ様。

◎ 単独音の練習を主としたもの。

○ London bridge is falling down  
Built it up with iron bars  
Iron bars will bend and break

my fair lady, [l], [f] を最初に。  
後には [d], [b] を加えて一番の  
歌詞を [l]-[d]-[b]-[f] 即ち  

↗[l]↘	の順で歌わす。橋板の
[f]↗[d]	
↖[b]↘	

上下する絵を使用。

○ For he's a jolly good fellow  
and so say all of us.

[l] [f] [v] を最初に, 後で [dʒ]。

○ The more we are together,  
the merrier we shall be for your friends are  
my friends and my friends are your friends.

[ð] [ə] [f]

○ I'm so happy, happy all the time. [h], [p], [l], [ð] [m]

○ Mary had a little lamb its fleece was white as snow.

And everywhere that Mary went the lamb was sure to go.

[l] [f] [v] [w] white lamb の

おもちゃ又は絵を使用。

○ When I was a lady and when I was a lady,  
a lady was I, and this way and that way  
and that way and this way.

[l] [ð] [w]

lady の代りに sailor, tailor 等を入れて,  
this way and that way で gestureをつける。

○ This sound goes like this [ð], [s], [z], [l]

this で近くで指す事を教える。

○ John Brown's body lies a-mould'ring in the grave,  
his soul goes marching on. Glory Hallelujah!

[dʒ], [l], [v], [b], [r]

○ Jingle bells! Jingle all the way! Oh what fun it is to ride in  
a one horse open sleigh! [dʒ] [l] [ð] [w] [ou]

○ Row, row, row your boat, gently down the stream, merrily,  
merrily, merrily, merrily, life is but a dream. [r] [ou] [l] [m]

オールの動く絵を使用する。

○ Are you sleeping, brother John, morning bells are ringing,  
ding, ding, dong.

[sl] [ðə] [mɒɪ] [r] [i:]

○ Large clocks mark time slowly, tick, tock.

Small clocks mark time faster, tick, tock,

and the little watches mark time, tiki, tocki, tock.

[m] & [k] at the end of words,

[l] at the beginning of, at the end of, and in the middle of  
words. 大小の clocks と watches の実物又は絵を用意する。

- ◎ Advanced class の為。 句とか文章を覚えさせ或程度意味も解らせる為。
- Oh, where is my little dog gone? Oh, where can he be?  
With his ears cut short and his tail cut long, oh where is he?  
[iəz], [teil], [ʃɔ:t], [lɒŋ] の意味をわからせる為おもちゃ又は絵を使用、種々の例を用いて cut short or long の drill 応用をやる。
- I love little pussy, her coat is so warm, and if I don't hurt her, she'll do me no harm; I'll sit by the fire and give her some food, and pussy will love me, because I am good.  
動物愛護の意味をわからせる為に出来ればおもちゃ又は本物の猫を抱いて歌わせる。
- Cuckoo calls from the wood; let us be singing;  
dancing and playing; spring time soon will be here.  
Cuckoo welcome your song; winter is going;  
soft breezes blowing; spring time soon will be here.  
Cuckoo warble away; bring the sweet flowers;  
sunshine and showers; spring time soon will be here.  
ここでは歌の一番目に重点を置く。 Cuckoo が森で呼んでいる。子供達が歌っている。踊ったり遊んでいる。春の景色。と四枚の絵を用意して歌と連結させる。
- Santa Claus will come tonight, if you're good, doing what you know is right, as you should.  
Down the chimney he will creep, bringing you a woolly sheep and a doll that goes to sleep, if you're good.  
クリスマスと関係あるが、だいぶ難しく長い歌詞である。それにも拘らず家庭でクリスマスの贈り物を受けている幼児達はその意味がわかると喜んで歌う。
- Sing a song of sixpence a pocket full of rye, four and twenty black-birds baked in a pie, when the pie was opened, the birds began to sing, wasn't that a dainty dish to set before a king?



The king was in a counting house, counting out his money, the queen was in the parlour eating bread and honey, the maid was in the garden, hanging out the clothes, down came a black-bird and pecked off her nose.

恐らく幼児用の歌詞としては最長のものと思われるがメロディーが美しいので英米の児童達と同じ様に喜んで歌う。絵を見せながら内容をわからせ、又韻を踏む事 (rhyming) も説明する。

◎ 単語又は句の入れ替えを主としたもの。

- Here we go round the mulberry bush
- |                    |      |           |                               |
|--------------------|------|-----------|-------------------------------|
| This is the way we | wash | our hands | so early in the morning.      |
|                    | clap |           | on a cold and frosty morning. |

朝やる事を絵と動作を交えて覚え込ませる。

- This is the way we
- |                  |          |           |          |
|------------------|----------|-----------|----------|
| wash our clothes | so early | Monday    | morning. |
| iron our clothes |          | Tuesday   |          |
| scrub the floor  |          | Wednesday |          |
| mend our clothes |          | Thursday  |          |
| sweep the house  |          | Friday    |          |
| bake our bread   |          | Saturday  |          |
| go to church     |          | Sunday    |          |

之も前の歌と同じ様にして曜日と其の日にやる事を結びつける。

◎ Alphabet の正しい発音を教える為。

- A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W and X, Y, Z happy shall we be, when we've learnt our A, B, C.

Alphabet の一つ一つの letter の正しい発音の訓練

◎ 数字を教える為。

- Baa! Baa! Black sheep, have you any wool?

Yes, sir, yes, sir! Three bags full, one for the master, and one for the dame, and one for the little boy that lives in the lane.

二人で対話的に動作をつけてやらせても良い。3=1+1+1 を教える。

- One man went to mow; went to mow a meadow,  
one man and his dog; Two men went to mow;  
two men, one man and his dog; three men went to mow;  
three men, two men, one man and his dog;  
four men went to mow; four men, three men, two men,  
one man and his dog;  
1—4 の数字と 4, 3, 2, 1 and 一の数え方。[w] の練習。
- One little, two little, three little Indians; four little, five little,  
six little Indians; seven little, eight little, nine little Indians;  
ten little Indian boys.  
1—10, 10—1 の数字の数え方, 発音。[litl] boys, boy, Indians,  
Indian の単復数の相違
- ◎ Stress と Rhythm を主としたもの。
- 'Jack and 'Jill went 'up the 'hill  
To 'fetch a 'pail of 'water,  
'Jack fell 'down and 'broke his 'crown  
And 'Jill came 'tumbling 'after.  
一行目と三行目に四つの stressed syllables があって二行目と四行目  
に三つの stressed syllables があることを良くわからせる。
- 'Twinkle, 'twinkle 'little 'star  
'How I 'wonder 'what you 'are  
'Up 'above the 'world so 'high  
'Like a 'diamond 'in the 'sky  
此の場合は各行に四つの stresses をつけ, はっきり発音させる。

此の「音声の発達と英語教育」は先に同じ題目で弘前大学における東北英語研究会で発表したものと、語学教育研究所発行の雑誌「語学教育」に記載したものとを基とし、其の後更に体験に依る研究内容を加えて up to date としたものである。